なぜ漢文を学ぶのか

漢文に親しむ

漢文の第一時間目にぜひとも触れなければならない問題に、漢文を勉強するのはなぜなのかということがある。漢文を学ぶ第一の理由は、教科書の漢文編冒頭「なぜ漢文を学ぶのか」（P一一六）にもあるように、漢字・漢文が日本語そのものを育てた大きな柱の一つであるという事実がある。これは、現代日本語から漢字・漢語を取り去ってみた場合を想像してみれば、生徒にもすぐ理解できることであろう。

ここでは少し視点を変え、わずか一世紀ほど前にはいかに漢詩・漢文というものが普遍的教養として人々の間に生きていたかを示す例として、明治の文豪夏目漱石と明治の元勲伊藤博文の漢詩を引いてみる。初めは漱石の「自画に題す」。

唐詩読罷 倚二欄干一　唐詩読み罷みて欄干に倚る
午院沈沈緑意寒　午院沈沈　緑意寒し
借問春風何処有　借問す　春風何れの処にか有る
石前幽竹石間蘭　石前の幽竹　石間の蘭

次は伊藤博文が晩年に人生の無常を嘆じた「京都の作」（現代語訳を付す）。

老来豪気易二銷磨一　老来　豪気銷磨し易し
五十星霜夢裏過　五十星霜　夢裏に過ぐ
欲下向二東山一尋中往事上　東山に向つて往事を尋ねんと欲すれば
荒墳累累故人多　荒墳累累　故人多し

年をとってからというもの強い気力は消えてゆき、
五十年の歳月は夢のように過ぎてしまった。
東山に向かって過去のことを聞こうとすると、
荒れ果てた墓が重なりあって多くの友が眠っているのが見えるばかりだ。

前者は漱石の日常における漢詩の位置を、後者は元勲の懐古の手段としての漢詩の功用を示している。伊藤博文は「春畝」という号を持つ漢詩人でもあった。単にこの例だけをもって漢文を学ぶことの意義を説くことはできないが、日本と縁のないものだと思っていた漢文が意外なところに顔を出していることに気づくには、充分であろう。明治の日本人にとっては、日常のささやかな興趣を描く（夏目漱石「自画に題す」）ときにも、京都の東山を望んで老年の感慨を述べる（伊藤博文「京都の作」）ときにも、漢詩が身近な自己表現の手段だったのである。

日本の古典としての漢文

漢文を学ぶ意義について、「なぜ漢文を学ぶのか」は、次のように述べている。

漢文の文献は次々に海を渡り、日本にもたらされました。私たちの祖先は、この漢文によって先進の文化を学び、豊かな文学や思想、文化を創り出してきたのです。

ここにいう「先進の文化」とは、儒教や諸子百家の哲学、仏教

などの宗教、政治学、法律や社会制度、文学、絵画・彫刻などの芸術、その他ありとあらゆる分野が含まれる。日本人にとって漢文は何よりも、そうした先進的な文化を受容するための手段だった。漢文によって取り入れられた文化が、その後の日本の文化の基底となったのである。そうした漢文受容の歴史には模倣の段階もあっただろう。しかし重要なのは、先人たちが模倣に終始したのではなく、先進的な文化を受容することによって、その刺激のもとに、日本独自の様々な文化を生み出したということである。

日本で漢文学が隆盛した時期は、奈良から平安にかけての遣唐使の時代、鎌倉室町の五山文学の時代、江戸時代の三期である。第一・第二の時期には学問はほんの一握りの階層による独占物だった。だがその時期においても、中国伝来の文化・学問と向きあうことによって、日本人は日本独自の文化を生み出してきた。一例をあげれば、「文選読み」という習慣がある。六世紀初頭に中国・梁で編纂された『文選』は、平安時代には、主に学問の家柄である博士家で伝承・学習されてきた。その博士家で行われたのが、「文選読み」である。それは、一つの漢語を、まず音読みし、つづけて訓読みするというものだった。たとえば、「細細腰支」という句を、「細細（さいさい）とほそやかなる腰支（えうし）のこし」と読むのである。こうした読み方は、学問の伝承のために工夫されたものだったと考えられるが、それは漢語に対する理解を深めただけでなく、対応する和語についての認識を深めるものでもあった。いわば、漢語と対比することを通じて、和語の表現力を発見し創造してきたのである。

江戸時代には学問が広く一般に普及したこともあり、漢学は知識人・読書階層に要求される必須の科目になって官民ともに隆盛を極めた。たとえば、中国伝来の儒教についての独自の研究が進み、さまざまな思想家があらわれ、オランダを通じて入ってきた西洋の学問を受容する基盤ともなった。漢詩・漢文の創作も盛んにおこなわれ、松尾芭蕉の『おくのほそ道』などの文章に見られる美意識は、漢文の世界を基底に持つものだった。明治になると漢学の相対的地位は低下したが、それでも江戸時代の余勢はまだまだ及んでいた。先に触れた夏目漱石・伊藤博文（春畝）の漢詩はそのほんの一例である。

現代の高等学校で漢文が必修科目になっているのもこの流れをくむものである。つまり、日本人が長きにわたって対象化し、そこからさまざまな発見をし、日本独自の文化を生み出す糧となってきた漢文を自らの古典としてとらえなおすことが、高等学校における漢文の目標なのである。高校の漢文では「日本の古典」として日本人が親しんできた漢文の世界を追体験し、理解することが重要なのであって、中国の文学や思想それ自体を専門的に学習することが第一目標なのではない。もちろん素材としては多くが中国のものだから、文化的背景なども含め、外国の文献としてできるだけ正確に読むという態度は重要だが、それと同じ程度に大切なのは、訓読の方法を理解し、日本人が受容してきた漢文の特徴を把握し、訓読の語調、日本語としての漢文脈に親しむということである。漢文学習の始めに、「日本の古典」として漢文を位置づける視点を確認しておきたい。

訓読の「国際性」

訓読という方法について、「なぜ漢文を学ぶのか」は、次のように述べている。

漢文を中国以外の地域の言語で読むために、各地域で独自の方法が生まれました。特に日本では、漢文を日本語の文章として読む訓読の方法が広く行われるようになりました。私たちの祖先はこの訓読によって、漢文の持つ簡潔さ、論理性、表現力などを日本語に取り入れ、言葉を豊かにしてきました。

訓読の方法は、確かに日本で独自に発展したものである。しかし、それは孤立した試みだったわけではなく、類似の方法は、朝鮮半島やベトナム等でも行われていたことが明らかになっている。朝鮮半島では「口訣」と呼ばれ、漢文を読む際、朝鮮語（韓国語）の要素を漢字で書き加え（日本の訓読の送り仮名にあたる）、漢文を朝鮮語の語序によって読むことが行われた。新羅時代から「吏読」（りとう）と呼ばれる表記方法も行われた。それは、「顧問教是去等」（「顧問せられたならば」の意）のように、朝鮮語の助詞や用言の活用形などを漢字によって表記したものである。さらに高麗朝時代の漢文訓読資料等も発見され、研究が進められている。またベトナムでは、ベトナム語独自の音を表記する「チューノム」という文字が生み出され、漢字・チューノム交じり文の表記法が行われた。これも、ベトナム語による、一種の訓読法と言えよう。日本の漢文訓読法は、東アジア世界で広く行われた漢文読解の試みの中から生まれ、その中で最も体系化されたものだったと言える。訓読法は確かに日本独自のものであるが、そこには国際的な背景があり、孤立した方法ではないのである。

現代において、中国について専門的に研究する場合には、当然外国語としての中国語を学ぶ必要があるだろう。だが、高等学校の漢文の授業においては、「日本の古典」として漢文を学ぶことが目標である。日本人が長く訓読によって読解・受容し、それによって日本語そのものを豊かにしてきた漢文を、学びの対象としているのである。「なぜ漢文を学ぶのか」は、「現代の私たちが日本の文学や文化の根源を見直し、現在の日常の言葉を深く理解するためには、漢文を学ぶことがどうしても必要なのです」と述べている。日本語の奥行きを理解し、豊かな日本語を生み出して行くためにこそ、漢文の学習が求められているのであるが、その背景には東アジア世界で広く行われた漢文読解の努力があったことを忘れてはならない。

訓読の「ゆれ」

漢文訓読体は、平安時代以来、さまざまな曲折をへて今日行われるような形に落ち着いたもので、独特のスタイルを持ち、その中にはいろいろな時代の語法が混在している。また、訓読と原漢文の正確な解釈とには、ズレが生じることもある。それは多くの場合、簡潔な原文を訓読するだけでは意味が伝わらないことがあるためであり、古文に現代語訳が必要なのと同じ理由である。

しかしより重要なのは、訓読そのものの「ゆれ」だろう。これは主に時代とともに日本語の語法が変化し、また訓読の習慣にも変化が生じたためである。たとえば、「大器晩成」という文は、「大器は晩成す」と訓読するのが通例であるが、「大いなる器は晩く成る」と訓読することも可能である。現在の訓点の規則と訓読

法は、江戸時代にほぼ定まり、明治以後に広く定着した規則・習慣に依っているが、言葉の習慣は完全に固定できるものではない。そのため、訓読する人による個人差等が出る場合もある。さらに、訓読は日本語への翻訳でもあるため、解釈の相違によって読み方が異なる場合もある。こうした訓読の「ゆれ」は、むしろ解釈や表現の多様性として受けとめるべきものだろう。高等学校の漢文でこの点にあまり厳格になる必要はないが、少なくとも指導者はこれらの「ゆれ」が生じ得ることに自覚的でありたい。

中国語と日本語

中国語と日本語とは漢字が共通し、訓読という方法によって二千年以上も前の文章まで読めてしまうことから、どこか類縁関係にある言葉のような錯覚を抱かれがちだが、実は全く系統の異なる言語である。訓読に入る前に、基本的にどのような相違があるのかを簡単にみておこう。

世界の言語は、文法上次の三つに大別するのが普通である。

①屈折語　ヨーロッパ諸語のように、語形つまり格や語尾が変化し、それによって文法的機能を示すもの。

②膠着語　日本語や朝鮮語のように、単語や語幹に語尾や接辞が接合していくことによって文法的機能を示すもの。漢文訓読における送り仮名の必要性はここから生じるわけである。

③孤立語　中国語のように、語形変化も接辞の接合もなく、いつも決まった語形のもの。

漢文の語順が英語のそれと似ていることに生徒たちは気づくであろうが、それ以外の点では似ていない。このように中国語は日本語とも英語とも全く異なる文法体系を持った言語である。しかし、中国語が「孤立語」であることによって、「膠着語」としての日本語の活用語尾や助詞等を送り仮名として補い、語順を変える返り点を添えれば、日本語として読むことができる、つまり訓読できることに先人たちは気づいたのである。

日本の古典文法との関連

生徒にとって漢文を学ぶということは、具体的には訓読された、すなわち日本語化された文章を学ぶということである。したがって訓読を指導するうえで、日本の古典文法との関連を常に意識させるということが大切になってくる。かつての漢文入門では、素読がよく用いられた。素読の重要性は今でも変わりがないが、現代では、その学習環境が整っていない。学習が進んで漢文に興味を持てるようになった段階で試みてみるとよいだろう。

漢文訓読に用いる助動詞

現在の訓読法で一般に用いる助動詞を一覧表にまとめておく。

語	意味・働き	漢字
ず	打消	不・弗
る・ら（ル）	受身	見・被・所・為
た（リ）	断定	為
し（ム）	使役	使・教・令・遣
べ（シ）	可能・許可・認定・当然・義務	可
ごと（シ）	比況	若・如
なり	断定	也

書き下し文

書き下し文の書き方を生徒に指導するときは、P一二三「書き下し文のまとめ」に記した、以下の点に注意が必要である。

①送り仮名は平仮名（歴史的仮名遣い）にする。
②日本語の助詞・助動詞に当たる漢字は平仮名にする。
③訓読のときに読まない文字（置き字）は書かない。
④再読文字は、最初の読みは漢字を用い、二度目の読みは平仮名にする。

（安藤　信廣）